

巻頭言●

新ジャーナルの創刊にあたって

神奈川大学国際経営研究所は創立 20 周年記念として、新しいジャーナルを創設することになった。最初は 20 年の歴史を持つ既存誌「国際経営フォーラム」の第 21 特別号として発行する予定であったが、研究所の新しい学問的支柱としての役割をはたすため、新規の査読論文誌の発行決定がなされた。ターゲットとする論文投稿者は若手、中堅の大学教員と優秀な大学院生である。実務者からの投稿も大いに歓迎したい。

新ジャーナルを成功させるためには、最初の 3 年が非常に重要であると考えている。特に論文の質のチェックには、学内外の研究者の協力をあおぎ、コメントを通して投稿論文の質の向上を目指し、一定の水準以上でなければ採択しないシステムを確立したいと考えている。ジャーナルに掲載された論文は、自動的に一定の評価を受けることができるようになることを目標としている。

伝統的に日本のマネジメント関連の論文は、海外で確立された理論の応用的議論である場合が多いが、まだ国内外で確立されていないような議論や論文も評価する方向で編集にあたりたいと考えている。議論の中で弱点も存在するが、切り口や分析方法がユニークである論文も一定の評価をするつもりである。そういった意味で、特に若手の研究者、大学院生にとってチャレンジの場となるような学術誌にしたい。

日本はモノマネは得意だが、独自の理論を確立することはあまり得意ではないといった議論があるが、そうではない。日本には、創造的、独創的なものを評価するシステムが存在しないだけである。

日本の独自性、独創性の議論の一つの例として、漫画・アニメがある。私は国際経営論が専門であるため、海外出張する機会が多くあった。もう 10 年以上も前、出張先のタイ、イタリア、スペイ

ンのホテルの部屋のテレビで、日本のアニメが放映されているのを観たときの驚きを今でも鮮明に覚えている。後日、日本の漫画・アニメの独創性について海外からの評価を知ることになった。漫画・アニメの分野で独創的な作品ができるのであれば、当然マネジメントの分野においても独創的な研究の可能性はあるはずである。日本人に独創性がないわけではない。

ただ、日本人は物事を論理的に構築するのが少し苦手であることは事実であろう。製造業において世界から評価されているトヨタ生産システムにしても、始めから現在のトヨタ生産システムを目指していたわけではなく、ある部分に手をつけたら、それに関連した他の部分も変更が必要になり、その積み重ねが現在のトヨタシステムである。ジャスト・イン・タイムを成功させるためには、高度の品質管理が必要であり、そのためには現場従業員のトレーニング制度の構築が必要になってくるといった流れの積み重ねである。トヨタ生産方式の理論的組み立ては、日本でなされたわけではなく、アメリカで分析され、MIT を主体とした研究チームによりリーン生産方式として理論化された。

日本は文化的に言葉や理論ではなく感性を大切にし、アメリカは理論を重要視する傾向がある。これは、経営学は国が持つ文化・社会的ベースの上に成り立っており、日本の経営学とアメリカの経営学には文化的差異が存在することを暗示している。

日本にもアメリカにも優良企業は存在する。しかしそのマネジメント手法は大きく異なっていることが多い。これは経営学では答えは一つではないことを意味している。登山で、頂上を目指しているが、どのルートで頂上まで到達するかは、それぞれの国がもつ社会的背景で大きく異なっていると考えられる。

ここに日本独自のマネジメント理論の確立の可能性が存在する。マネジメントが文化・社会的背景から成り立っているのであれば、当然日本で確立されたマネジメント学のある部分は普遍的ではなく、外国では評価されない。しかし、ある部分は普遍的であり、海外でも高く評価される可能性がある。

日本が目指すべきは、海外からの経営理論の導

入と同時に、日本独自のマネジメント理論の発展と確立であろう。このジャーナルの目標は、ほんの少しでもそのようなマネジメント学の発展に貢献することにある。そのためには投稿者として、また論文審査員として多くの研究者のご協力をあおぐ必要がある。

経営学に関わる多くの皆様のご協力をお願いいたします。

神奈川大学国際経営研究所 所長

榊原 貞雄